
Adventurers of sun

鈴都小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Adventurers of sun

【Nコード】

N8571C

【作者名】

鈴都小鳥

【あらすじ】

プリズム地方にある中心町『メデオス』。ある二つのトレジャーギルドの人々が『知らない運命』が来る時が迫ってくる・・

プロローグ

世界が生まれた年・・・。

光の神が生まれ、太陽を創る。

次に惑星を作った。

水星、地球、金星、火星、木星・・・

そして土星、天王星、海王星、冥王星と名づけながら
全て9つの『惑星』を『太陽系』として名付ける。

次に闇の神が生まれる。

闇の神は光の神が創った惑星を次々に壊した。

そして闇の神は無限の闇と生み出した。

惑星は粉々になり、ひとつの欠片しか残っていない。

ただ、一つだけ『地球』と言う物が無事に碎けられなかった。

光の神は改めて『地球』に植物や海と言う物を生み出した。

そして人間を生み出す。

1000年、2000年、10000年と光の神は創り続けた。

その時、闇の神が途端に腹が立ち、光の神に切り殺す。

『地球』は今でも成長し続けている。

ただ、光の神がいないので、変わりに闇の神が『闇の心』を持つ人間や植物を作り始めている。

そして『争い』が生まれた。

・・・現在20xx年。

プリズム地方で、ある考古学ギルドが二つ存在する。

一つ目の考古学ギルドは『エウクレスト』。
もう一つは『サタンデス』。

そんな二つのギルドの中の14人がある宿命を密かに果たされることになることは知らなかった・・・

『A d v e n t u r e r s o f s u n』

それは、『太陽の冒険者』と意味をする。

第壱 闇の中で

プリズム地方の中心町、『メデオス』・・・

夜の暗闇の中、枯れ葉を踏むような音を立てながら歩いている男がいる。

男はため息をつきながら立ち止まった。

辺りはあまりにも静か。寒いそよ風まで吹いている。

男は黒いマフラーを静かに首を巻いた。

その後、手でそつと胸に巻いてある包帯を当てながら眼を静かに閉じた。

微かな風の音、葉が散る音・・・

男は、息を止めて静かにそれを聞いた。

その時、男は右足で、蹴りだした。

大きな鐘より大きい音と同時に足をぶつけた。

男は右足を戻し、眼を開けて前を見た。

そこには勢いよく切り倒された大きな木しかなかった。
男はまたはあつとため息をついた。

「・・・『闇人』・・・では、なかったか。」

そう呟きながら、崩れたマフラーを綺麗に整え始めた。

その時、向こうから茶色い髪をした男が走ってきた。

「……やっぱりこんなところにいたか。探したぞ。」

「……『ラカ』。」

男は『ラカ』と言う茶髪の男に向かってにらみつけた。

ラカはふつと苦笑いし言った。

「俺達は親友だろ？どうして俺がお前の目の前にいるとき、怒るのさ？」

シオンは黙ってマフラーを首に軽く閉めた後、ラカに体当たりした。

「……お前が俺の修行の邪魔してるから。」

シオンはふんつとそっぽを向き立ち去ろうとした。

ラカはくすつと笑い出した。

「おいおい、俺はただギルド会議を始めると言い伝えようとしただけじゃないか、あまりそうツンツンすんなよ。シ・オ・ン！」

シオンは立ち止まって大人しくラカの方向へ向いた。

その時にシオンの心の中では嫌らしく舌打ちしていた。

彼らはプリズム地方の『メデオス』にある二つのトレジャーギルドのうち、

『サタンデス』というギルドの一員である。

『サタンデス』の基地は、『メデオス』の中央にある大きな矢印銅像から東にある。

『サタンデス』はそれぞれのギルドの中で一番実力者が多い。そんなことを通称『悪魔の集い』と呼ばれているほどだった。

そんな二人・シオンとラカが『サタンデス』（以後SD）内の実力者の一員である。

数分後、シオンとラカはギルド基地に着き、その中の会議室に入っていた。

そこには、一人の女の人とリーダーらしい男がいた。

ここ、『サタンデス』には現在4人（リーダー含め）しかいない。もう一つのギルド『エウクレスト』（以後EK）も現在4人という。

シオンとラカは自分の席に座り込んだ。

シオンの隣にいた女はふふっと笑いながらシオンを見ている。

「・・・何がおかしい。」

「いや、別になんでもないよ、シオンお兄ちゃん」

「・・・気持ち悪い。」

シオンはしわをよせ、マフラーで顔をひっそりと隠した。

ラカは横目でシオンを見てからリーダーに言った。

「そろそろギルド会議を始めましょうか？」

ラカの冷静な一言で
こうして『サタンデス』のギルド会議が始まった。

第貳 『サタンデス』の夜会議

SDの今夜のギルド会議のメモ用紙にはこう書かれていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・夜のパトロールの会 担当決め

・『アルゲラ洞窟』の探索

・新人隊員に関して

- - - - -
- - - - -
- - - - -

リーダー以外の三人は全員『新人』と言う言葉に目につき、思わず固まってしまった。

『サタンデス』に新人隊員が来るなんて5年か10年ぶりなのである。

ここにとって新人隊員が来るとはいきなりな出来事だ。

SDのリーダーのミグルは喉を唸りながら言い始めた。

「今日メモの通りに会議をするが・・・まずは『新人隊員』に関しての事だ。」

ミグルは3〜4枚の紙を出し、それをそれぞれ皆に手渡す。

その紙には、SDが入ってくる新人隊員の名前やその詳しいことが書かれていた。

「今回、新人隊員としてここに入ってくるのは4人。『ピアス・サクラテス』、『ラズリ・サミーナ』、『ラオ・クラフティ』そして『ルクス・ダ・ノーベン』だ。」

その時、シオンの隣にいた女、エイシーがはっと顔を上げた。

「『サクラテス』ってどつかで聞いたことあるけどお・・・その『ピアス』って子の親、何をしている人なの？」

ミグルはメモ用紙を見ながら言った。

「ピアスの父は立派な剣士だ。名前は『アルメア・サクラテス』だ」
「あの『アルメア』の子だって?!」

ラカは嬉しそうに大声で言った。

「『アルメア』ってメデオス国で有名なあの剣士ですよね!」
「まあそうだな。」

ミグルはゆっくりとうなずき、話を続けた。

「明日、その4人がここに来る予定だ。と言うわけで、『新人歓迎会』を開こうと思っている。」

ラカとエイシーは喜びながら手を上げ

「賛成!!!」

と叫んだ。

だが一方、シオンは『ルクス』のプロフィールを見て顔をしがめていた。

どこかで見たような感じがしたのだ。

それを気づき不信に思えたラカがシオンに問いかける。

「シオン、シオンも知ってる人いるのか？」

「……別に。」

シオンは静かにとメモ用紙を裏に伏せた。

「とにかく、俺も……歓迎会に賛成です……。」

と静かに言った。

「まったく、シオンは空気の読めない奴だな！無理矢理やらせてるって見たいじゃないかあ。」

ラカは呆れた顔でシオンに言った。

ミグルはラカに「やめなさい」と言い首を振った。

「シオンはシオンなりの都合つてもものがあるんだ。そう厳しく言わないで楽しんでやろうじゃないか。」

ミグルは優しくラカに言った。

ラカは仕方なく黙ってシオンを見た。

シオンはまだ辛そうな顔をしている。

その妹のエイシーは心配していたが声をかけないで黙ってシオンを

ちらつと見ているだけにした。

自分がシツコク言ったように厳しく言われそうだったから。

「黙ってくれ。」

と。

第参 『レウクレスト』（前書き）

『レウクレスト』の主人公ライアンがなぜか『^{ムチ}鞭』です。
闇装備キャラが嫌いならやめといったほうが・・（え

第参 『レウクレスト』

そのころ、西のギルド『レウクレスト』もギルド会議をしていた。
『レウクレスト』（今後RK）も同じリーダーを含めて四人と言う
少人数ギルドだ。

しかし、そのギルドも新人隊員が三人やってくるという。

「では、これで本日のギルド会議を終える。では解散。」

RKのリーダー『アルダイ』は隊員たちにゆっくりと言い伝えた。
会議を終え、一人のゴーグル少年が背伸びをし、ほっと一息ついた。
その時、黒いコートの男が近寄り、面白がって少年の髪の毛をひっ
ぱった。

「そろそろ特訓を始めるぞ。」

男はにつこりと笑顔で少年の顔を見た。
少年はイライラと男の手をたたきつけた。

「キラ先輩いきなりなんすかっ！俺の髪の毛をひっぱりたいほどそ
んなにイジリキャラになったのですか？！」

キラはくすぐすと笑いながら少年に言い返した。

「失敗坊主のライアン君には言われたくないね。」

ライアンはキラの答えに腹立ち、鞭を取り出し、持ち手にあるボタ
ンを押した。

そして鞭に電流を流し込み始めた。

青い電流が完全にムチにたまり、彼はキラに勢いよく叩きつけようとした。

しかし、キラは大量のトラップカードを取り出し、大きな盾を取り出す。

ムチが大きな盾に直撃し跳ね返された。

「君は年上に対して暴力を振るうようになったのかな？」

キラはトラップを全て手に戻し、もう一度ライアンに微笑んだ。

ライアンは舌打ちをし鞭を静かに片付けた。

その後、キラとライアンはギルド基地から出てある公園についた。

「・・・なんでこの俺が特訓しまくんなきゃだめなんだよ・・・
3年も続いているのに・・・」

ライアンは物々を言い始めた。

キラはトラップを一枚一枚地面に落としながら言った。

「仕方がない。ら違反は三年続きで実績最下位だから。ライアンがいつも頑張っている事はこの俺だってわかってる。でもいつも依頼^{クエスト}を失敗しているじゃないか。」

「依頼のことだろ？俺は強さじゃあ一番じゃないか！！」

キラは繭を上げ、ライアンに言った。

「強さだけでは全て上手くいくとはいかない。そんな事の為に特訓していたのかい？」

ライアンの我慢もついに限界だった。

キラを鞭で叩きつけながらライアンは言った。

「キラは良いよな！強くて実力も良くて・・・それに綺麗事まで言えて!!」

「別に綺麗事までだなんて・・・」

ライアンはもう一発キラに叩きつけてから走り去った。

「・・・ライアン。」

キラはどうしようもなくライアンが闇夜の中に消えるまで見続けているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8571c/>

Adventurers of sun

2010年10月8日22時04分発行